

連載

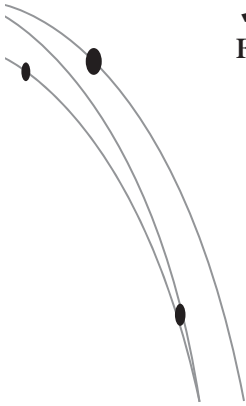
## フィールド・アイ

Field Eye

スウェーデンから——③

ウプサラ大学 奥山 陽子

Yoko Okuyama



### ☐ コーヒーを片手に

「フィーカ」という言葉をご存じだろうか。「北欧の『フィーカ』をお家でも」「フィーカのクッキーお取り寄せ」「フィーカで効率性アップ」——最近日本語でも、少しずつ耳にするようになった。

フィーカ (fika) とは「コーヒー休憩」を意味するスウェーデン語だ。その語源には諸説ある。よく見かけるのは、言語学者ラース＝グンナー・アンダーソンの説。アンダーソン氏によると、fika はコーヒーを意味する古いスウェーデン語 kaffi の倒語 (とうご) で、20 世紀初頭にストックホルムで流行った言い回しだという。スウェーデンでは、職場で、家族と、あるいは友達と、一日に何度かフィーカの時間がある。

連載最後となる今回は、フィーカに隠されたスウェーデンの面白い歴史、そして単なるコーヒー休憩を超えたフィーカの哲学について書いてみたい。

### コーヒーとスウェーデン史上初の臨床試験

今日では、世界トップクラスのコーヒー消費量を誇るスウェーデン。年間のコーヒー消費量は、一人当たり 8 キログラム (一日一人当たり平均 2 杯強) にも上る。

しかしそんなスウェーデンでもかつて、コーヒーが禁止されていた時代があった。遡ること 18 世紀、当時の国王カール・グスタフ 3 世 (1746-1792) は、コーヒー禁止令を敷いたのだ。なんでも、コーヒーは「身体に害毒で、寿命を縮める」と信じていたという。

面白いことに、カール・グスタフ 3 世は、単にコーヒーが害毒だと信じていたばかりでなく、その信念を

科学的に実証しようとしたらしい。彼は、収容所から 2 組の双子囚人を連れてきて、それぞれの双子ペアについて、片方には死ぬまで毎日紅茶を、もう片方には死ぬまで毎日コーヒーを飲ませることにした。そして、医師に命じて、どちらが長生きするかを監視させた。「寿命が遺伝子だけで決まるのならば、ふたごの寿命は同じはずだ。であるならば、仮にふたごの寿命が違ふとき、それは遺伝子のせいではなく、それぞれが育った環境要因の差 (毎日紅茶を飲むかコーヒーを飲むか) のせいだといえるだろう」という発想だ。

「スウェーデン史上初の臨床試験」と呼ばれる、この「ふたご研究」。ふたご研究としては、実は世界初だったのではないかと見られる。ふたご研究の祖と言われる、イギリスの人類学者で統計学者のフランシス・ゴルトン (1822-1911) が登場するのは、実に 19 世紀に入ってからのことである。

なお、この先駆的な実証実験には、笑えるオチがついている。というのも、結局、双子の寿命を見届ける前に、担当医師らは亡くなり、カール・グスタフ 3 世自身も 1792 年に仮面舞踏会で暗殺されてしまったのだ。実証実験はとん挫し、検証結果は永遠に得られぬものとなった。紅茶を飲んでいて囚人が一番先に亡くなったらしい、という説もあるが、真実は確かではない。

カール・グスタフ 3 世が、「コーヒーが寿命を縮めることを実証」していたら、今頃スウェーデンは、コーヒー大国ではなかったのかもしれない。そう考えると、歴史とは不思議なものである。もっとも、この伝え話の信憑性に懐疑的な見方もある。だがいざいざにしても、火のない所に煙は立たない。カール・グスタフ 3 世のストーリーは、エビデンスに基づく政策逸話を好む<sup>1)</sup>、なんともスウェーデンらしい逸話ではないか。

### フィーカから見えるスウェーデンの働き方

さて、時代は下って 21 世紀に話を戻そう。

私の職場でも、一日に二回、午前 9 時と午後 3 時に短いフィーカの時間がある。時間になると皆めいめにマグを持ちよって、話に花が咲く。話題はいろいろだ。研究の話、政治の話、ペットの話。クロスカントリースキーやマラソン。聞き役に回る人もいるし、会話をリードする人もいる。短い時間で切り上げる人もいれば、30 分ほど話に花を咲かせる人まで人それぞれ

れた。

今でこそ、「フィーカ好き」の私。しかし、日本で生まれ育ち、アメリカで博士号を取った者の性だろうか、赴任当初は「そんなに休憩ばかりしては、仕事が終わらないのではないか」と不思議に思っていた。というのも、我が職場の標準的なスケジュール（例えば、ティーチングがなく、セミナーのある日）はこうだ：8時30分～9時ごろ出勤。9時にフィーカ。11時30分にランチ。13時15分から14時30分までセミナー。15時にフィーカ。16時30分～18時の間に退勤。あっという間に一日が終わってしまう。

だが郷に入れば郷に従え。気が付いたら、フィーカとランチのスケジュールを前提として仕事を組み立てるようになった。たとえば、お昼休みから戻ると「いまから午後の休憩までに終わらせられそうなものは何だろう？」と、無意識のうちに考えている。

いつの間にか、同僚とのフィーカは私にとって、息を整える時間になっていた。一日の仕事（研究）を、ひとつつらなりの文章に例えるならば、フィーカは、途中途中で読点を打って息を整えること、と言ってもいいだろうか。

実際、コロナ禍で在宅勤務が推奨され、フィーカがなくなってしまった期間、なんとなく一日一日を「読点を打たないまま、だらだらと一文を書き続ける」ような気持ちで過ごしていたことがある。

そしてフィーカは、自分の呼吸を整えるだけでなく、同僚とのコミュニケーションの場である。同僚は今何に取り組んでいるのだろうか、何に興味をもっているのだろうか、週末はどのように過ごしたのだろうか、等々。一見すると他愛ない会話を通じて、相手の呼吸や熱量を感じ取る。そうすることで、アイデアを交換するにせよ、仕事を頼むにせよ、物事がよりス

ムーズにいく。結果的に、仕事で達成できることの範囲が広がるような気がする。

つまりフィーカというのは、単にコーヒーを飲むことではなく、「一日の途中で手をとめて、他人（ひと）と集い、ともに過ごす時間」のことであり、そういう生活のデザインなのだろう。ひとりあたり年間のコーヒー消費量、8キログラム。これは単にカフェインの量を測っているのではない。それだけ、人と集い、時間を共にしていることの証なのだろう。

おわりに

この記事の執筆時点、スウェーデン政府は新型コロナウイルス感染対策の規制をほぼ全廃した（2022年2月9日）。いよいよウイズ・コロナの時代がやってこようとしている。おっかなびっくりではあるが、一方で職場フィーカの再開を心待ちにしている自分もいる。

ウイズ・コロナの時代、日本でも働き方のデザインを再考する方々も少なくないのではないか。職場の新習慣に、フィーカはどうだろうか。今は亡きカール・グスタフ3世には、「フィーカの効用を信じるだけでなく、実証してみたまえ」と言われてしまうかもしれないけれど。

1) たとえば、本誌2022年1月号の拙稿「フィールド・アイ スウェーデンから——① 行政データを駆使したコロナ禍検証」をご参照ください。

おくやま・ようこ 2020年5月にエール大学にてPh.D. (経済学)取得。2020年9月よりスウェーデン・ウプサラ大学経済学部助教授。主な論文に“Empowering Women Through Radio: Evidence from Occupied Japan” (2021)。専門はジェンダー格差の実証経済研究。